

鎮魂、報恩、感謝の念をもつて

小田原市支部 譲原 武彦（弟）

戦没者 譲原 純一郎

戦没地 中国・河南省

先の大戦終結から既に六十五年、将に「光陰矢の如し・歲月人を待たず」と言われますが、今日の平和と繁栄を享受しながらも、思い起こせば、幾多の春秋に富みし諸靈が、往時、秋ありて、大命を奉じて国家の干城となりますや、家族郷党の絶大なる期待と名誉を担い、故郷を後に、勇躍して国土防衛の任に、或いは、遙かなる異国の戦場に上られました。

時、恰も戦火の拡大に伴い、北は酷寒のシベリアに、広漠たる中国大陆に、或いは、炎熱酷暑の南海の島々にあつて、苛烈なる戦闘に身を挺し、病魔飢餓とも戦いながら、武運叶わず、懐かしの我が家に帰ることなく、最愛の妻子、父母、兄弟姉妹等に相ま見ること無く、万感の思いと、悲痛な叫びを遺して逝ったであらう、その無念さを思い遣ります時、或いは、戦火戦災に見舞われて、尊い犠牲となられた諸靈に思いを馳せます時、唯々、首を垂れて合掌し、痛惜痛恨の情と、戦争の虚しさ、平和の尊さを知るのみであります。

諸霊が生前の面影や、元気な声は、今更、見る術も、聞く術もありますが、其の忠烈と顕彰は、齊しく世人の崇敬致すところであります。

当遺族会に於いても、創立六十周年を記念して、去る平成十九年五月、「小田原市遺族会六十年史」を発刊致しました。各界代表者の、祝辞と平和へのメッセージ、それに、遺族六十一名の方からは、恐らく六十年目にしてであろう今、語り継ぎたい平和の尊さ、命の尊さ、遺族の思いの数々を寄稿して下さいました。

私事で恐縮ですが、長男であった兄は、戦時、北支派遣軍の一将校として、中国は河南省における、最前線の警備隊長であった昭和十七年十二月二十三日未明、現地での戦闘で寡兵よく奮戦するも、武運叶わず、銃弾を浴びながら壮烈なる戦死を遂げ、時に享年二十二歳でした。

現地の本部から送られてきた遺骨、戦死時の血の付いた軍服や遺書、生前と軍隊関係写真、軍隊日誌等の遺品類、戦死を報道された現地の東亜新報、国内各社の新聞報道等は、貴重な資料として、今尚、大切に保存してあります。

又、私も、お陰様で地元の小田原市遺族会会長と、財団法人神奈川県遺族会副会長を務めさせて戴いて居りますが、何時の世に在っても、国難に殉じられた御魂の御遺徳と、お心を偲びながら、遺族の絆を深め合つて、英霊の顕彰と、奉賛敬慕の事業や行事に、一層の努力をして参る所存で御座います。

終りに臨み、今は亡き御魂の、安らかならんことを、ご祈念申し上げますと共に、更なる御加護を賜りますよう、恭しく敬虔の至情を捧げ、ここに、自作の拙い短歌と漢詩を捧げます。

惜別の 吾に托せし 言の葉の 耳に尽ききぬ 軍用列車

殉國の 炎と燃えし 英魂の 声なき声を 吾は聞くなり

砲煙と 銃火交ゆる 戦場に いのち煌めく^{きら} 死生一如

英霊を偲ぶ

英霊 純忠 護国の志 家郷 遠く離れて 異国に埋むる

悠久の 魂魄 身命を捧げて 靖国の栄照 永久^{とわ}に願わん